

興福寺旧境内の調査

— 第439・450次

1 第439次調査

この調査は、奈良市花芝町内における個人住宅新築工事に伴う事前調査である。調査地は興福寺中金堂の北西約70mで、平城京東六坊大路西側溝とその西の左京三条六坊十六坪東南隅の検出が想定された。『興福寺流記』によれば、三条六坊十三～十六坪の4町は、天平宝字年間に興福寺へ施入され、菓園・園地であったとされている。しかし、第418次調査（『紀要2008』）をはじめ、これまでの調査では近世の「奈良町」関連の遺構・遺物が多数発見されたが、古代の様相は明らかではない。

調査は、東六坊大路西側溝の検出を主目的に、狭長な敷地にあわせた幅2m、長13mの調査区を設けて実施し、面積26㎡、期間は2008年7月1日～8月11日である。

層序 調査地の現地表面は西へ緩やかに下降する。層序は興福寺寺地に近い東半部と近世の造替が著しい西半部とで大きく異なり、東は上から近現代の黒灰色土—灰褐色土—茶褐色砂土—礫混じり灰黄色粘土（地山）、西半は上から暗灰色土—焼土①—暗褐色土—焼土②—暗青褐色土—暗褐色土②—暗青灰色土—青褐色砂礫土（地山）に大別される。東と西との層序の違いは南北溝の掘削と茶褐色砂土の造成に起因しており、東が約30cm高い奈良平安時代の検出面は、東六条大路の路面と側溝・街区との関係を示している。

遺構 遺構は層序と重複関係から3期に大別される。

①期の遺構（図184-①） 近世末の遺構で、西半に東西石列SX9280とそれを壊す南北石列SX9275や小穴があり、東半には4基の埋甕と礎石、土坑SK9285などがある。東西石列SX9280は20～30cm大の石塊を、南に面を揃えて2段以上積み上げる。石列の南は碎石状の砂や焼土の互層で固く埋められ、北側は粘質土で軟らかい。近現代の建物基礎と同方向で重なり、前身建物等の基礎に関わる遺構と考えられる。東西7m分検出。南北石列SX9275は20～30cm大の石塊を幅広い帯状に東に面を揃えて積み上げる。SX9280を壊して造られるが性格は不明。SX9280と重複する小穴SX9287～9289の側壁には木質物が認められ、桶などを据えたと思われる。

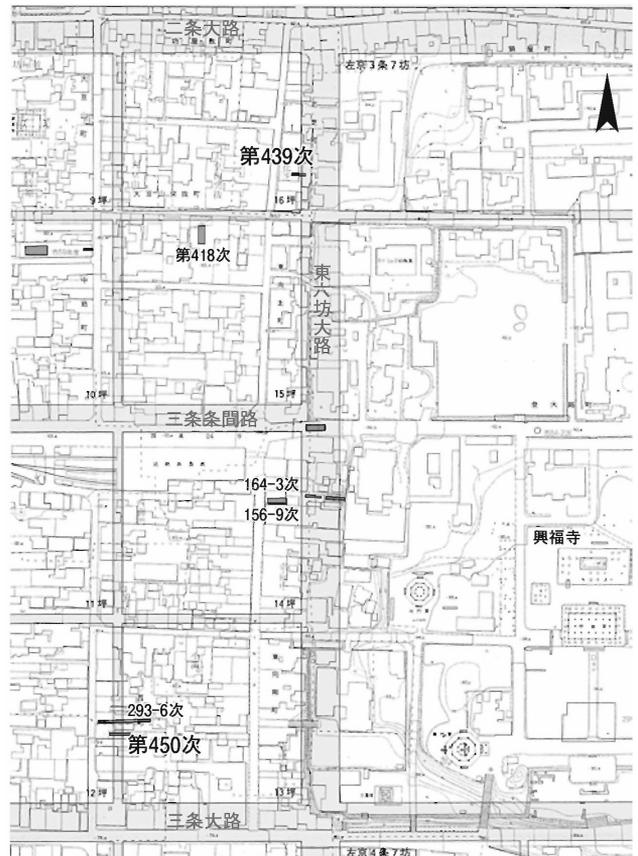


図183 第439・450次調査区位置図 1:5000

土坑SK9285は石列SX9280の延長線上にあり、石列の抜取穴とみられる。埋土から石塊とともに近世末～近代初頭の土器、陶器などが出土した。埋甕SX9281～9284と礎石SX9286は南を土坑SK9285に壊される。埋甕SX9281・9282は胴径40cm、高さ30cm以上の平底の瓦質土器で、SX9282を壊すSX9281がより浅く埋められている。SX9283・9284も重複関係にあり、SX9283を抜いた後にSX9284が据えられる。SX9284の底には直径3cmの円孔が開く。礎石SX9286は、表面に梵字が刻まれた花崗岩製板碑の上半部を伏せて据えたもので、上面は埋甕の口縁よりも低い。埋甕と一体で敷地奥に設けられた便所やつくばいの可能性がある。なお、SX9282底から銅銭（元豊通宝・皇宋通宝）3枚が出土した。

SX9294は土器器羽釜を埋めたものでB期よりも古い。周囲に小石を詰めて正立することから、骨蔵器の可能性はあるが、器内に遺物などはなかった。

②期の遺構（図184-②） 中世後期～近世初の遺構である。西半に瓦敷SX9295、中央に土器溜SX9290、東に石組SX9292、瓦敷と土器溜の間にそれらを壊す石組SX9291がある。瓦敷SX9295は石塊と丸・平瓦片を乱雑に敷いたもので、その上下層と共に軟弱な低湿地の整地とみられる。土器溜SX9290は東に薄く西に厚い傾斜を持ち、大量

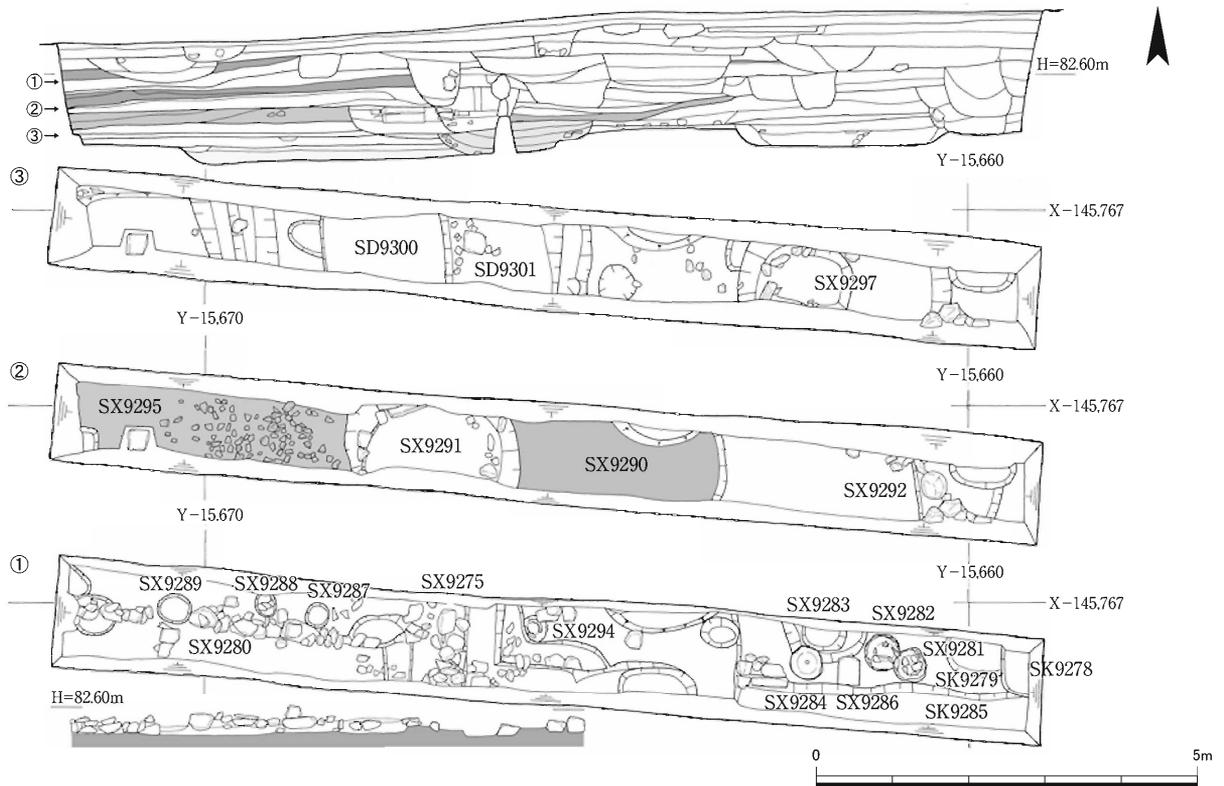


図184 第439次調査遺構平面図・断面図 1:100

の土器片と僅かな焼壁が蜜に詰まり、硬く締まっている。土器溜の東は緩傾斜で高まる固い粘土面が広がり、土器溜は興福寺寺域に沿う路面の地盤強化が目的と考えられる。土器は整理箱30箱に及ぶ土師器皿類で灯明痕跡をもつものがある。東端の石組SX9292は幅約1m、深さ0.7mの穴に大型石塊を詰めたもの。北と南になお続き性格不詳。中央の石組SX9291は径2.2mの掘方内に、50cm大の石を積み上げた水溜と考えられる。東壁を含む東半は後に穴を掘って壊され、弧を描く西～北壁が残る。西壁際に投棄された大型石塊の隙間から美濃瀬戸産の天目碗、鉄製包丁、金銅製針金、漆器碗残片などが出土した。東壁を壊す穴からは近世初めの土師器皿とともに、中国明代の染付盤（漳州窯か）が出土した。染付盤には段を持って開く口縁部と底部内面に花や竹林を描く。

③期の遺構（図184-③）奈良・平安時代の遺構で、南北溝SD9300、南北溝SD9301、土坑SK9297がある。南北溝SD9300は幅5.1m、深さ0.3mの素掘り。埋土は暗青灰色の微砂と粘土の互層で9～10世紀代の土師器杯などが出土した。東六坊大路西側溝に相当する。溝の上には10世紀後半の黒色土器碗などを含む砂質土が調査区西端まで広がり、上面に南北小溝や動物の足跡がみられた。沼状の低湿地と化していたのであろう。南北溝SD9301は砂質土の上面から掘られた溝で、西岸を小石で護岸する。溝幅約1.8m、深さ0.4m。東岸はSD9300を踏襲し、西岸を造りかえることで幅を狭めたものである。埋土には11～13世紀の土器が含まれる。SD9300の東は東六坊大路西の路面にあたり、礫や砂が混じる茶褐色砂土が緩やかな

傾斜で高まっており、奈良時代の須恵器平瓶などが出土した。土坑SK9297は茶褐色砂土上面から掘り込まれた底の平坦な土坑で、東西幅2.8m、深さ0.4m。穴の西寄りに偏って完形品を含む大型瓦片が出土し、東壁を13世紀前半の瓦器碗を含むC期の石組土坑SK9293に壊されている。土坑SK9297の西の小穴SX9298は径0.3m、深さ0.2m。暗茶褐色粘土を埋土とし、奈良時代の土器片が少量出土したが性格不明。

遺物 前述の遺構に伴うもののほかに、平安時代から江戸時代の軒瓦22点を含む瓦類、近世陶磁を含む土器類、近世以降の人形・塔形土製品、銅銭17枚（寛永通宝2、中国銭15）の銭貨、石製五輪塔などがある。

まとめ 調査の結果、南北溝SD9300は奈良時代に東六坊大路西側溝として掘られたことを確認した。遷都後に溝は徐々に埋まり、広い低湿地と化していくが、菓園・菜園と関わる遺構は確認されなかった。11世紀には溝東岸際に幅を狭めて掘り直され（SD9301）、13世紀以降、室町時代頃にも埋め立てなどがなされたが、建物等が建つのは近世以後のことである。土層にみえる2枚の焼土・炭層は江戸時代に数度の大火を示し、近世末の建物はそれら焼土・炭層の上に、東向通りに直交する方向で建てられ、近現代に踏襲される。東向通の名称について、通りに面した建物がすべて興福寺側を向いていたからの説明がある。古絵図には東向通の東側は林や湿地として描かれており、通の東側に建物が建つのは元和年間以降の事とされている。調査結果は通説と矛盾しないことを確認したにとどまる。（西口壽生）

2 第450次調査

はじめに

奈良市角振町内での商業施設建設にともなう発掘調査。調査地の位置は左京三条六坊十二・十三坪。興福寺旧境内の果園・園地と近世以降の「奈良町」にあたる。1980年代の町屋調査によると、調査地には「年代不明」で「空き家」状態の「町屋」が確認されており、「A」の景観評価を受けている(奈良市教育委員会1987『奈良町V 昭和61年度伝統的建造物群保全構想報告書』)。この「町屋」は発掘調査直前まで存在しており、直近の地図・航空写真等でも平面形態がある程度分かる。これらによると、まず、小西通りに面する主屋は入り口を西に向ける。主屋の西南部には坪庭があり、類型ではⅡ～Ⅳ型のいずれかにあたるだろう(奈良市町並建造物群専門調査会1982『奈良町 都市計画道路杉ヶ町高畑線の工事にともなう町並調査』)。主屋には、北に中庭をもつ便益棟が接続し、離れ座敷ないし蔵がこれに続く。さらにその東には、裏庭と蔵が存在するようである。調査地は東西に狭長であり、隣地の構造物と排土置き場の関係から、東六坊坊間東小路想定位置に東西約10m、南北約2mの調査区を設定した。面積は約20㎡。これは「町屋」の便益棟と、一部主屋に該当するところである。調査は平成20年12月2日に着手し、12月17日に完全に終了した。

基本層序

調査区内の基本的な層序は上から次のとおり。①表土。厚さ約5～15cm。②近世の上層包含層。調査区の西半では灰黄褐色、東半では褐色で土器・瓦、炭を多く含む。この層は調査地内の所々で地表面に露出している。厚さ約30～40cm。③近世の下層包含層。黄灰色で土器・瓦を少量含む。厚さ約15cm。④地山。灰白色の粗砂混じりの粘質シルト質土。調査区西部で地山を検出した標高は、

約79.50～79.60mである。遺構検出は上層包含層中、下層包含層の上面、地山の上面でおこない、それぞれの面で図面・写真等の記録を作成した。

検出遺構

調査区内は、北東の一部で現代の攪乱をうけていた事を除いて、近世の包含層が良好に残存していた。遺構は一部中世を含むが、ほとんどが近世以降とみられるもので、土坑・溝等を多数検出した。多くは性格不明である。以下、主な遺構について述べる(図185)。

土坑SK9226 調査区西端にある不整形土坑。地山上で検出した。規模は南北1.5m、深さ0.25m。鎌倉時代の土師器が出土している。性格は不明。

廃棄土坑SK9225 地山上で検出した東西0.8m、深さ0.85mの隅丸方形の土坑。埋土上層では瓦器、瓦等が出土した。埋土下層では黒色土器A、木片、鹿角、獣骨等が廃棄されたように埋まっていた。

柱穴SK9227 地山上で検出した東西0.5mの円形の土坑。深さ0.75mと一定の深さがあることから、柱穴の可能性はある。時期は不明。

廃棄土坑SK9228 下層包含層上面で検出した土坑、ないし溝。東西幅は最大2.05mで深さは0.3m。土坑内は大量の炭と赤色の焼土が充満しており、近世の土器が含まれる。焼土等の処理のため掘られた遺構とみられる。

排水施設遺構SX9230 底部に穿孔のある甕を倒立させて埋設した遺構(図186)。上層包含層中で検出した。甕は口径約25cm、高さ約27cm。掘方の上面は厚さ5cmの漆喰ないしモルタルで覆い、甕の底部穿孔に対応する部分に径3cmの穴がある。こうした構造から、水琴窟などの排水施設とみられる。掘方の底には白色粘土が敷かれており、甕の口縁から液体が漏れない構造になっている。この粘土は東に高く、西に低い。甕の肩部には、径1.5cmの穿孔がある。穿孔は甕の西北部分にあり、ここから内

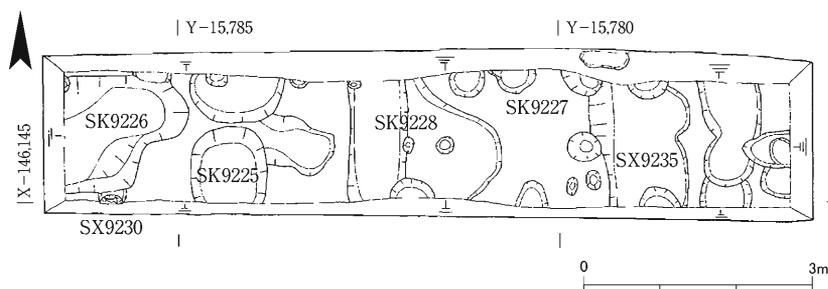


図185 第450次調査遺構平面図 1:100

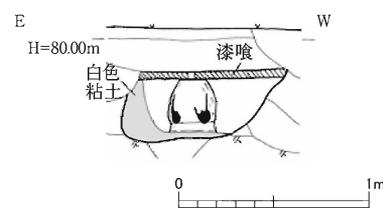


図186 SX9230断面図 1:40

部の液体が排出されたのだろう。なお甕の内部は空洞となっていたが、漆喰よりも上部は瓦がつまる新しい土坑で壊されていた。この遺構が水琴窟であるとすれば、「幻の水琴窟」となっていただろう。

落ち込み状遺構SX9235 上層包含層中で検出した遺構で、地山を0.4m程度掘り込む。上層包含層からの深さは最大0.7m。この落ち込みよりも東では地山を掘り込む溝や土坑が多数重複しており、調査区の西半よりも一段低くなっている。土坑には瓦が多くつまるものなどもあった。

平面で確認した遺構のほかに、南壁において上層包含層の上面に厚さ2cm程度の黒色の粘土質層を一部確認している。これは土間等の床面であった可能性がある。また、西壁において下層包含層の上面で、焼土層を一部確認している。なお東六坊坊間東小路の側溝は後世に削平されたとみられ、確認できなかった。

出土遺物

土器類 近世の包含層からは18世紀を中心とする土器・陶磁器が出土した(図187)。1はSK9225出土の黒色土器A。底部外面に「市宅」の墨書がある。10世紀前半のものだろう。2はSX9235出土の犬形土製品。手捏ねによる整形で、脚をすべて欠いている。類例には織豊時代のものとして大阪城址出土品がある。3はSX9230の信楽焼の甕。内外面の全体は茶褐色の鉄釉だが、底部外面のみ露胎。肩部から黒色釉のかけ流しが5単位ある。底部と肩部の穿孔は焼成後外面から施したもの。18世紀以降のものと思われる。(加藤雅士)

金属類 銅製煙管の吸口1点、鉄刀1点、水滴2点、鉄釘2点、鉄不明製品1点が出土した(図188)。銅製煙管の吸口は長さ6.2cm、直径は吸口端部で0.3cm、軸側で1.1cm。軸の木質が残存する。鉄刀は長さ32.5cm、幅4.6cm、厚さ

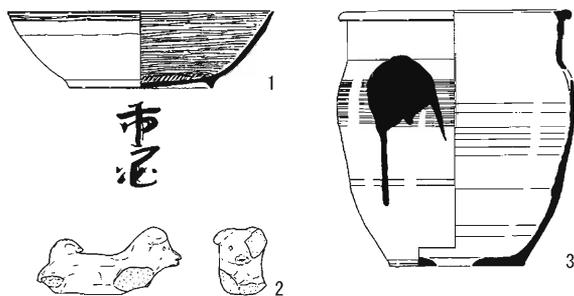


図 187 第 450 次調査出土土器類 1 : 4 (3のみ 1 : 8)



図 188 第 450 次調査出土近世遺物

2.8cm。下半部が折損している。写真手前の水滴は銅鑄造製。底面直径4.4cm、高さ2.4cm。注口部と把手がつく。阿古陀形。時期は近世と考えられる。写真奥の水滴は銅鑄造製鍍金。底面直径4.9cm、高さ2.8cm。頸部に連珠文。丸くて平らな胴部に直線的に立ち上がる頸部をもつ。

(国武貞克)

おわりに

調査地は昭和初期には「獣医者」宅(奈良市教育委員会1998「奈良市歴史資料調査報告書」14)になっている。近世包含層の良好な残存状況から、これが発掘直前まであった「町屋」とみてよいだろう。調査区は便益棟や主屋の土間の部分にあたるため、建築に直接関係する柱穴等は確認できなかった。しかし、断片的に分かることがある。例えば、排水施設遺構X9230は「町屋」の主屋の土間部分にあたり、この近くに手水等があったと考えてよい。またSX9235は便益棟の中庭よりの位置にあり、瓦等の不用品を始末するための土坑が繰り返し掘られた状況が考えられる。この「町屋」は建物内部を調査されることなく失われたが、今回の調査はその構造とそこでの生活の一端を知ることができた。(加藤)